

跡津川断層東部，真川露頭上部トレンチ調査結果

Result of excavation survey on the eastern part of Atotsugawa fault

武部 晃充[1], 竹内 章[2], バートル ハス[3], 迫垣内 薫[4]
Akimitsu Takebe[1], Akira Takeuchi[2], baator Has[3], Kaoru Sakogaichi[1]

[1] 三井金属資源開発, [2] 富山大・理・地球科学, [3] 富山大・理・地球, [4] ミンデコ
[1] Mindeco, [2] Dept. Earth Sci., Toyama Univ., [3] Earth Sci., Toyama Univ

科学技術庁の地震フロンティア研究に関連して、筆者らは跡津川断層東部，真川露頭上部においてトレンチ調査を実施した。調査の結果，トレンチ壁面の堆積物中には跡津川断層の地震イベントにより形成されたと考えられる，多数のすべり面を伴う地滑りブロック，層内褶曲が認められた。年代測定結果から，トレンチ地点では最近の2.4万年間に5ないし6回のイベントがあったことが推定される。

跡津川断層系を対象とした活断層研究が，科学技術庁「地震フロンティア研究」の一環として平成8年度から実施されている。本研究では跡津川断層系，茂住祐延断層における調査坑道掘削をはじめ，活断層の形成メカニズム解明をめざし総合的な調査・観測が行われている。

跡津川断層沿いには明瞭な変動地形が随所に認められ，1858年に発生した安政飛越地震では断層のほぼ全線ですべりが生じたとされている（松田，1966，竹内，1998）。跡津川断層中央部では，宮川村野首地区で行われたトレンチ調査により約1万年前以降の詳細な活動履歴が明らかにされている（跡津川断層発掘調査団，1989；栗田・佃，1993）が，跡津川断層東部の活動履歴の詳細については不明な点が残されていた。このため筆者らは跡津川断層東部においてトレンチ調査を行い活動履歴の解明を試みた。

トレンチ調査は，常願寺川の支流である真川沿いに位置する跡津川断層露頭（真川露頭；竹内ほか，1983）の上部で実施された。真川露頭では跡津川断層が段丘堆積物に明瞭な変形・変位を与えているものの，それより上位の地層が発達せず，段丘堆積物以降の活動履歴に関する情報を読みとることはできない。このため，本調査では跡津川断層の最近の活動に関する情報が残されていることが期待される真川露頭上部段丘面上に発達する湿地堆積物を対象にトレンチ掘削を行った。

トレンチは跡津川断層主断層の南東約20m地点から，主断層走向に直交して深さ約2m，長さ約20mにわたって掘削された。トレンチ壁面には真川湖成層とそれを覆う堆積物が確認され，その堆積物中に跡津川断層直交方向に傾斜する低角（20度以下）で多数のすべり面を伴う地滑りブロックや層内褶曲が認められた。これらの後生構造は跡津川断層の地震イベントにより形成されたと考えられる。堆積物中から採取した炭質物の年代測定結果から，トレンチ地点では最近約2.4万年間に5ないし6回以上のイベントがあったことが推定される。

トレンチ調査地点の地震イベントの詳細については現在解析中であるが，今回のトレンチ（跡津川断層東部）におけるイベントと宮川村野首地区（跡津川断層中央部）のイベントの年代は一部重なるものの，必ずしも常に一致しているわけではなさそうである。すなわち，跡津川断層東部の活動性は中央部と異なる可能性がある。